

## 第1回日本タバコフリー学会主催 市民公開講座

# 「女性の宿敵タバコの真実」

## 女性の肺は男性よりもタバコに弱い

みやもと ひであき  
宮元 秀昭

(財)脳神経疾患研究所附属 総合南東北病院 呼吸器疾患研究所 所長  
NPO 法人 女性呼吸器疾患研究機構 理事長

女性では男性と同じ喫煙量において、喫煙効果が高く、有害化学物質の体内吸収量が大きく、肺機能の低下が大きいと報告されている。とくに喫煙量と肺機能の低下との関係を調べるといずれの喫煙量においても男性より肺機能の低下が大きい。さらに少量喫煙や副流煙の影響も男性より受けやすいという喫煙感受性の高さが指摘されている。女性が男性よりタバコの影響を受けやすい原因としては、解剖学的性差(女性の方が肺自体が小さい、気道径が小さいなど)、肺の成長発育の差異(女性の方が早熟で加齢が早いなど)、気道過敏性が高い、全身炎症性マーカーC 反応性蛋白が高いなど多くの事実が報告されている。また女性は映画やマスコミの影響を受けやすいため、若年者の喫煙の開始につながりやすく、一度喫煙を開始すると禁煙が困難で、再喫煙率も高いとされる。

「タバコ病」ともいわれる COPD は、従来男性の肺疾患といわれていたが、最近女性患者が急増している。女性の COPD が増加している原因の1つに、喫煙感受性の高さが指摘されている。疫学的に、喫煙量が同じだった場合男性より女性の方が COPD を発症しやすいことが明らかになっている。

タバコの肺がんに対する人口寄与危険率は、日本人男性で 70%、女性で 26%と推定されており、女性肺がんはタバコとの関係は男性ほど強くないように感じられる。事実肺がんは喫煙男性に圧倒的に多いため、一般的には男性の方が喫煙の影響を受けやすいように思われがちであるが、女

性は男性より少ない喫煙量で肺がんを発症し、肺がんの平均年齢が男性より若いことから、タバコによる肺がん発症のリスクは統計学的に女性の方がはるかに高い。さらに女性の方がタバコ煙の発がん性物質の影響を受けやすいことが多数報告されている。非喫煙者の女性肺がんの増加が問題になっているが、その主犯である女性の受動喫煙に対しては、発がん物質の多くは、タバコを吸った煙(主流煙)よりも、先端から立ち昇る煙(副流煙)に多く含まれていて、喫煙男性の妻の肺がん死亡率は、非喫煙男性の妻より明らかに高く、夫の喫煙量とともに高くなるなど多数の報告がある。さらに女性の遺伝子や女性ホルモンのタバコの影響が報告されている。

現在日本では、若い女性でタバコを吸う人の割合が増加している。これが20年後30年後に女性がん患者の急増という形で大きな社会問題となることは間違いない。とくに、これから子供を産み育てていく若い女性の喫煙は、確実にその子供にも影響を及ぼす。自らの身体だけではなく、次の世代をも蝕むタバコは一刻も早く止める必要がある。

ヒトゲノム解析が完了してから、各人の遺伝子を調べる技術の簡素化に伴って、遺伝子とがん感受性との相関を疫学的に調べようという研究が行われるようになった。この分野の研究は始まったばかりであり明確な結果が得られるまで地道な研究を積み重ねる必要があるが、私たちのNPO法人では現在女性の喫煙感受性を含む性差遺伝子解析の研究を積極的に行っており、その結果に期待している。

#### 講師紹介：

##### 学歴および職歴

昭和56年3月 秋田大学医学部卒業  
平成3年4月 三井記念病院呼吸器センター外科科長就任  
平成15年3月 順天堂大学医学部外科学助教授(呼吸器外科学研究室室長)就任  
平成20年1月 財団法人 脳神経疾患研究所附属 呼吸器疾患研究所所長就任  
同 附属 総合南東北病院 呼吸器センターセンター長  
平成20年6月 NPO法人女性呼吸器疾患研究機構設立 理事長就任

専攻領域： 肺癌外科療法、胸膜中皮腫外科療法、女性呼吸器疾患、胸部画像診断、感染対策、がん緩和ケア医療など

資格・役員： 日本外科学会指導医・日本呼吸器外科学会指導医・日本呼吸器内視鏡学会指導医・日本胸部外科学会指導医・医師臨床研修指導医・日本呼吸器外科学会評議員・国際心臓胸部外科学会評議員・インфекションコントロールドクター・緩和ケア基本教育指導

者・肺がん CT 検診認定医師・3 学会合同呼吸療法認定士認定試験委員・臨床呼吸生理研究会世話人・ほか